

## はじめに

「光陰は矢のごとし」と言います。父・大平正芳が他界しましたのは、ついこのあいだのことのような気がしておりましたが、あれから早くも満十六年になります。仏式で言えば、今年の命日が十七回忌です。そういう数え方からいたしますと、今年はまだ、母・志げ子の七回忌、そして、父・母にとっては長男に当たる私どもの兄・正樹の三十三回忌の年でもありません。

そこで、これを機に、三人を偲ぶささやかな会を催させていただくとともに、これまで何冊か上梓されました父の文集の補遺とも言える本書を刊行して、皆様にお贈りすることといたしました。

本書刊行の狙いは、これまで世に出された父の本の内容が、どちらかと言えば政治論や社会・経済論に傾いた硬い文章を中心に編集されていたのに対し、対談の速記録やインタビュー記事など軟らかな読み物に残っている父の肉声の再現を通じて、父が生前おつきあいがあつた方々に、父の面

影を偲んでいただきたいことはもちろん、直接の接触がなかった方々にも、父の本当の姿を知っていただきたいというところにあります。

その意味では、今回の編集作業は、私どもにとっても、いわば新しい父との出逢いの場を提供してくれる大変に良い機会となりました。その内容は雑誌や新聞に載ったものがほとんどですから、その片鱗しか現れておりませんが、父は決して気難しい、無骨一点張りの寡黙な政治家というわけではなく、ユーモアにも富み、さまざまな分野にわたって闊達な議論を展開できる人間味のある人物でもあったのです。例えば、父と信仰との関わりもその一つです。生前、父は「日本の政治家としてはめずらしくクリスチャン宰相だ」とよくいわれましたが、自らの信仰については、その政治家という立場への配慮からでしょうか、最後まで多くを語り書くことは敢てしなかったようです。それだけに、本書に収録された「政治家が聖書を読むとき」という故田中英吉司教との対談は、父の信仰について知ることの出来る数少ない資料の一つとして貴重なものとなりました。カトリック教会のいわば内輪の雑誌上での、その信仰を共有するもの同士の語らいの場だからこそ、あれほど縦横に自らの聖書論を展開したのでしょうか。父の思想なり哲学には、やはりこのような深い信仰上の裏付けがあったのかと、今更のように亡き父への追慕の情を新たに感じる機会となりました。

本書の題名は、父がよく色紙などに記していたものなから、「在素知賢」を選びました。出典ははっきりしませんが、これは、やはり父がしばしば引用した「シンプル・ライフ・アンド・ハイ・シンキング」（思想は高く、暮らしは質素に）の漢字版で、その人柄や生き方、考え方を示すのに相応しいものと思ったからです。

終わりになりますが、対談・インタビューなどの原稿の転載をお許しいただきました対談者、および各雑誌・新聞社の関係者の皆様、また、本書の作成に当たりいつもながらのお世話になった皆様に対して、心から御礼申し上げます。

平成八年四月

大平裕  
大平明  
森田一